

2

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小雨が霏もやのようにけふる夕方、両国橋を西から東へ、さぶが泣きながら渡わたっていた。

双子縞ふたごじまの着物に、小倉の細い角帯、色の褪あせた黒の前掛まえかけをしめ、頭から濡ぬれていた。雨と涙とでぐしよぐしよになった顔を、ときどき手の甲こうでこすするため、眼めのまわりや頬ほおが黒く斑まだらになっている。ずんぐりした軀からだつきに、顔もまるく、頭かぶが尖とがっていた。——彼かれが橋を渡りきったとき、うしろから栄二えいじが追おって来た。こっちは瘦やせたすばしっこそうな軀からだつきで、おもながな顔の濃こい眉まゆと、小さなひき緊しまった唇くちびるが、いかにも賢ていそうな、そしてきかぬ気の強い性質をあらわしているようにみえた。

栄二は追いつくとともに、さぶの前へ立ち塞ふさがった。さぶは俯うつむ向むいたまま、栄二をよけて通りぬけようとし、栄二はさぶの肩かたをつかんだ。

「よせたら、さぶ」と栄二が云いった。①「いいから帰かえろう」

さぶは手の甲こうで眼めを拭ふき、咽むせびあげた。

「帰かえるんだ」と栄二が云いった、「聞きえねえのか」

「いやだ、おら葛西かさいへ帰かえる」とさぶが云いった。「おかみさんに出ていけつて云いわれたんだ、もう三度めなんだ」

「あるきな」と云いって栄二は左ひだりのほうへ顎あごをしゃくった、「人ひとが見るから」二人の少年は橋のたもとを左へ曲まがった。雨は同じような調子で、殆ほとんど音もなくけぶっていた。

②「おらほんとに知らなかったんだ」とさぶが云いった、「ゆうべ粉袋こなぶくろを戸納とどへしまつたときに、勝手に使うから一つ出しておけて、おかみさんに云いわれた、だから一つだけ残のこしといたんだ、そしたらその袋ふくろが出でしつ放はなしになって、おかみさんは使つかったあとでしまつてけつて、その袋ふくろを返かえしたのに、おれがしまわすれ忘わすれたっていうんだ」

③「癖くせだよ、癖くせじゃねえか」

「粉こなが湿し気をくっちゃつた、へまばかりする小僧こぞうだつて」さぶは立停たちどつて、手の甲こうで眼めのまわりをこすりながら泣ないた、「——おら、返かえしてもらわなかった、そんな覚えはほんとにねえんだ、ほんとに知らなかったんだ」

「癖くせだつてば、おかみさんはなんとも思おもっちゃあいいえよ」

「だめだ、おら、だめだ、ほんとにとんまで、ぐずで、——自分でも知しつた、とても続けられやしねえ、もうたくさんだ」さぶは喉のどを詰つませた、「おら、思おもうんだが、いっそ葛西へ帰かえつて、百姓ひやくしやうをするほうがまだつて」

広い河岸か通しりの、右みぎが武家屋敷ぶけやしき、左ひだりが大川おほがわで、もう少しゆくと横網よこあみになる。折助*1も人足*2ともわからない中年ちゆうねんの、ふうていのよくない男おとこが二

人に、穴あなのある傘かさをさして、なにかくち早はやに話わしながら、通りすぎていっ

た。その男おとこたちの、半纏はんてんの下から出でている裸はだかの脛すねが、栄二にはひどく寒さむそうにみえた。さぶはあるきだしながら、小舟町こぶねまちの「芳古堂ほうこどう」へ奉公ほうこうに

来てから三年間の、休やすむ暇ひまもなくあびせられた小言せうごんと嘲笑ちやうせうと平手打ちへいぢうぢのことを語かたった。それは訴うたえの強つよさではなく、赤児*4のなが泣なきのような、弱よわよわしく平板へいばんなひびきを持もっていた。大川おほがわの水みづがときたま、思おもいだしたように石垣いしがきを叩たたき、低い咳せきの音をたてた。

「奉公ほうこうが辛いのはどこだつておんなしこつた、おかみさんの口の悪いのは癖くせだし」と栄二はつかえつかえ云いった、「それにおめえ、女おんななんてもと、——車くるまだ」

栄二がさぶの腕うでに触さわり、二人は立停たちどつて川のほうへよけた。からの荷車かからくるまを曳ひいた男おとこがうしろから来て、二人を追おいぬいていった。

「腕うでに職しやくを付けるのは辛つれえさ」と栄二は続つけた、「考かんえてみな、葛西へ帰かえつたつて、朝あから晩ばんまで笑わらつてくらせやしねえだろう、それとも百姓ひやくしやうはごし*3ょう楽らくか」

「葛西のうちなら」とさぶが云いった、「出でていけなんて云いわれることだけ

はありやあしねえ」

「ほんとにそうか」

⑤ さぶは返辞をしなかった。栄二も返辞を期待していなかった。さぶは葛西にある実家のことを考えてみた。腰の曲った喘息持ちの祖父、気の弱い父と、男まさりで手の早い母、朝から母と喧嘩の絶えない口やかましい兄嫁、三人いる弟妹と、呑んだくれの兄と、五人もいる甥や姪たち。うす暗く煤だらけな、古くて狭くて、ぜんたいが片方へ傾いている家や、五反歩^{*4}そここの瘦せた田畑など。さぶは途方にくれ、しゃくりあげながら、またあるきだした。

「おめえにやあ田舎がある」いっしょにあるきながら栄二が云った、「どんなうちにしる帰るところがあるからいい、だがおらあ親きようだいても身寄りもねえ独りぼっちだ、今年の春、おらあ店を追ん出されるようなことをしちまった、追ん出されるか自分でおん出るか、どっちか一つという、とんでもねえことをしちまったんだ」

さぶはそろそろと振り向いて、栄二の顔を見た。好奇心^{こうきしん}からではなく、戸惑^{とまど}ったような眼つきであった。⑥ 栄二はふきげんな、怒^{おこ}ってでもいるような口ぶりで、自分が去年から幾たびか帳場の銭をぬすみ、それを主婦のお由^{よし}にみつかったのだ、と告白した。

お由は二度だけしか見なかったのだから、それともすっかり知っていて、わざと知らないふうをよそおったのか、いずれにもせよ、栄二は死ぬほど恥^はじ、もう店にはいられないと思った。自分をぬすつとだなどとは考えもしなかったが、銭箱から銭をつかみだした自分の姿が、あさましくて恥^はずかしくて、そのまま店にいる気になれなかったのだ。

「だが、店をどびだしてどこへゆく」と栄二は続けた、「おらあ八つの年、大鋸町^{おののこ}で夏火事^{おののこ}にあい、両親と妹に焼け死なれた、おれ一人は白魚河岸へ釣りにいって助かったが、ほかに身寄りは一軒もなかった、おや

じは伊勢^{いせ}から出て来た^{きた}と云ってたが、伊勢のどこかおらあ覚えちゃあいねえし、覚えていたって頼^{たの}ってゆけるもんじゃあねえ、おらあそのときくれえ自分のうちのねえことが悲しかったこたあなかった」

「知らなかった、おら、ちっとも知らなかった」とさぶが呟いた、「——それで栄ちゃん、がまんしたんだね」

「銭も二度とはぬすまなかった」

二人は横網の河岸まで来てい、さぶが立停^{たまり}って、地面をみつめ、濡^ぬれて重^{おも}くなった草履^{ぞうり}の先で、地面を左右にこすった。(山本周五郎「さぶ」)

*1 折助^{せすけ}侍の召^めし使い。 *2 人足^{ひとあし}力仕事をする労働者。

*3 ごし^{ごし}ょう楽^{がく}のんきなこと。

*4 五反歩^{ごはんぽ}Ⅱ五反。一反は三百坪^{つぼ}(約九九二m²)。

問1 ——線①「いいから帰ろう」とありますが、このときの栄二の気

持^もちを説明^{せつめい}した次の文の() A・Bにあてはまる地名として最も適^{てき}当^{とう}なものをおとから選^えび、それぞれ記号で答えなさい。

さぶを、(A)ではなく、(B)に帰らせようという気持ち。

ア 両国橋 イ 葛西 ウ 伊勢

エ 大鋸橋 オ 小舟町 A () B ()

問2 ——線②「おらほんとに知らなかったんだ」とありますが、さぶ

はどんなことを知らなかったというのですか。最も適^{てき}当^{とう}なるものを次のうちから選^えび、記号で答えなさい。

ア 台所で使うから粉袋を一つ出しておけと言われたこと。

イ 粉袋を返してもらい、しまっておけと言われたこと。

ウ 粉袋が一つだけ出しっ放^{はな}しになってたこと。

エ 粉は出しておくと、湿気をすってだめになること。 ()

問3 ——— 線③「癖だよ、癖じゃねえか」とありますが、栄二はおかみ

さんのどんなところを「癖」だと言っているのですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 自分の言ったことをなんとも思っていないところ。

イ なんでも奉公人のせいにしてしまうところ。

ウ しかるときにきつい言い方をするとところ。

エ 自分が人にたのんだことを忘れてしまうところ。

〔 〕

問4 ——— 線④「赤児のなが泣きのような、弱よわしく平板なひびきを

持っていた」は、さぶのどんな様子を表していますか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 自分にひどい仕打ちをしたおかみさんに怒りがこみ上げている様子。

イ つかかった三年間の奉公を思い返ししながら、悲しみに打ちひしがれている様子。

ウ 家族のことを思うことで、現実のきびしさからのがれようとしている様子。

エ 自分を助けるために栄二に何かしてほしいと強く願っている様子。

〔 〕

問5 ——— 線⑤「さぶは返辞をしなかった」とありますが、その理由として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア まずしいとはいえ、帰る家があることを、田舎のない栄二に言うべきではないと思ひ直したから。

イ 家族が自分を受け入れてくれるのは明らかなので、あえて返答するまでもなかったから。

ウ 家族が自分を必要としてくれるかどうか確信が持てず、答えようがなかったから。

エ 家族が自分をあたたかくむかえてくれるとはとても思えなかったから。

〔 〕

問6 ——— 線⑥「栄二はふきげんな、怒ってでもいるような口ぶり

……告白した」について、次の問いに答えなさい。

(1) このような口ぶりになったのは、だれに対する怒りがあったからですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア さぶ
イ お由

ウ 伊勢のおやじの実家
エ 栄二自身

〔 〕

(2) 栄二が、店のお金をぬすんだことをさぶに告白したのはどんな気持ちからですか。「自分」「さぶ」「辛い思い」「奉公」の四つのことばを使って、「〜という気持ちから。」につながるように、四十字以内で書きなさい。

という気持ちから。

◆ 文の組み立て(2)

文節と文節の関係には、次のようなものがあります。

① 主語・述語の関係

例 飛行機が 空を 飛ぶ。

② 修飾・被修飾の関係

例 あめんぼが 水の 上を 進む。

③ 並立の関係

二つ以上の文節が対等にならんでいる関係を並立の関係といいます。並立の関係にある文節は、必ず連文節となります。

例 父と 母が 笑う。(「父と母が」で主部になる)

海は 広くて 深い。(「広くて深い」で述部になる)

わたしは 電車にも 飛行機にも 乗りました。

(「電車にも飛行機にも」で修飾部になる)

④ 補助の関係

あとの文節が実質的な内容をもたず、前の文節に補助的に意味をそえる関係を補助の関係といいます。補助の関係にある文節は、必ず連文節となります。

例 鳥が 飛んで いる。(「飛んでいる」で述部になる)

ぼくは 送って あげようと 思う。

(「送ってあげよう」と「修飾部になる」)

このような関係で結びついた連文節が、さらに他の(連)文節と①④のような関係で結びつくこともあります。

1 次の——線部の文節と文節の関係として最も適当なものをあとから選び、記号で答えなさい。

(1) 父にも 母にも ぼくは まだ 打ち明けて いない。 ()

(2) 君が 言った ことは 本当だったね。 ()

(3) ぼくも その パンを 食べて みたい。 ()

(4) あなたに 去年 預けた ものは まだ ありますか。 ()

ア 主語・述語の関係

イ 修飾・被修飾の関係

ウ 並立の関係

エ 補助の関係

2 次の各文の——線部の連文節について、あとの問いに答えなさい。

① 優勝までの道のりは、長く厳しい。

② 雨が降ったから、大会は中止になった。

③ クラスの団結、それが今年の目標だ。

④ 知っているのは、ぼくと妹の二人だけだ。

⑤ 心配した父は、かなり強く反対した。

(1) ——線部の連文節を構成する二文節は、どんな文節と文節の関係で結びついていますか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 主語・述語の関係

イ 修飾・被修飾の関係

ウ 並立の関係

エ 補助の関係

- ① ()
- ② ()
- ③ ()
- ④ ()
- ⑤ ()

(2) ——— 線部の連文節は、どんな文の成分になっていますか。最も適當なものの中から選び、記号で答えなさい。

ア 主部 イ 述部 ウ 修飾部
 工 接続部 才 独立部

- ① () ② () ③ ()
 ④ () ⑤ () ()

3 次の各文の中に、主語・述語の関係はいくつありますか。

- (1) わたし書いた絵がかべにはられています。 ()
 (2) 引っこした先は、駅一つ分はなれた、となりの町でした。 ()
 (3) 母が一番気にしていたのは、ぼくがちゃんとあいさつをしているのかどうかということでした。 ()

4 次の各文から、例にならって、主語・述語の関係にある文節をすべて書きぬきなさい。また、文全体の主語(主部)と述語(述部)になっているものに○をつけなさい。

〔例〕わたしは、トンボが飛ぶのを見ました。

(答え) ○わたしは——見ました

トンボが——飛ぶのを

(1) 冬になると、湖がこおるほど気温が下がるそうです。

5 次の各文の組み立てを图示したものととして最も適當なものをおとから選び、記号で答えなさい。(……は主語・述語の関係、→は修飾・被修飾の関係を表します)

- (1) 大きなバッグをもった人がいる。 ()
 (2) 白い馬が広い草原を走る。 ()
 (3) にこやかでやさしそうな人はとなりのおじさんだった。 ()
 (4) 木の上で鳥がちゅちゅと鳴いた。 ()
 (5) 本当にここに伝説の宝箱があるのか。 ()

(2) 歩道がせまいのは、安全という面ではよくない。

